

# Joyce Carol Oates の *Bellefleur* に おけるポストモダニズム

森 井 美 保

## I

Joyce Carol Oates (1938-) は “On Fiction in Fact” というエッセイの中で事実の表象の信憑性について “Especially today, in an electronic era in which staggering quantities of facts are available, many of us feel, as readers, that we can trust the truth of only a fraction of what we read, even when it’s presented as ‘true’ by seemingly reputable writers and publishers.” (*Where* 76) と述べている。ここからわかるのは Oates が事実の表象の信憑性に信頼を置いていないということである。更に Oates は同じエッセイの中で “Writing is an art and art means artifice, the artificial. That we are keenly aware of this today is a testimony to our higher standard of truth, no less than to our diminished expectation of encountering it.” (77) これは、書くことが人工的である以上、事実の表象も人工的にならざるを得ないということを示している。言い換えると、作者の思い込みや意見が事実の表象の中に溶け込んでしまう可能性があるということである。よってそれはもう単なる事実の表象ではなく、その作者の考えが入った（たとえそれが意図的ではなかったとしても）事実の表象として提示されたフィクションとなってしまうのである。「真実に出会える確立が低い」とは、その作者の構築物としての事実の表象に出会う確立が高いということである。つまり、それはその時点で、すでに事実の表象ではなく、それを表象した作者の見解の表象となる可能性があるということなのである。Barbara Foley はこのような事実の表象の

構築過程を以下のように的確に表現している。“A truth is being told, with “facts” to back it up, but a teller constructs that truth and chooses those facts.” (67) Oates の *Bellefleur* (1980) は我々が何の疑問も抱かずに読んだり見たりしている事実の表象が実は人工的なものであって、その表象が伝えようとする真実というものもまた虚構であるということを暗示する小説になっていると思われる。

当然ながら、事実の表象の問題は、文学の世界よりも歴史という事実を扱う歴史学の世界の方がより重要な問題とされている。歴史学者のヘイドン・ホワイトは「歴史における物語性の価値」という論文の中で、歴史記述の物語性について以下のように述べている。

現実の出来事は、話としての形式的一体性を備えていると示されるのでなければ正確に表現されたことにはならない、というのは幻想である。だが、この幻想が規定する願望、この幻想が満たす欲求とは何なのだろうか。この謎めいた願望、この欲求の中に、われわれは物語化を行なう叙述一般が持つ文化的な機能を見、物語るだけでは足りず事件に対して物語性をも与えずにはおかない普遍的とも思える要求の裏にある心理的衝動をかいまみるのである。(20)

更に、その物語性の裏にある作者の衝動について「物語性は現実を教訓的に解釈する衝動、つまり、考えられうるモラルすべての源である社会制度に現実を重ね合わせようという衝動の直接のあらわれではないとしても、それに密接に関係してはいるのである」(34)と述べている。ホワイトは、客観的とされる歴史記述においても何らかの方向性に導かれた物語化が行なわれており、よってそこには人工性や虚構性が存在することを指摘している。物語化された歴史記述が本当に客観的と言えるのか、それがホワイトの述べているところである。これは Oates が事実の表象に対して抱いている疑問と同じであると考えられる。

歴史や事実をどう記述するかはポストモダンの小説が前提とする重要な問題の一つである。カナダの文学研究者であるリンダ・ハッチオンは、表

象の政治学、特に「ポストモダンの表象の政治学——あらゆる表象を特徴づけているところのさまざまなイデオロギー的価値と興味」(10)という問題に焦点を当てた『ポストモダニズムの政治学』の中で「ポストモダニズムは表象についての我々の模倣的前提に疑義を呈することになる。つまり表象の透明性と常識的自然性についてのわれわれの前提が問われることになるのだ」(48)と述べている。この「表象の透明性と常識的自然性」というのは、リアリズム的な客観的で一貫した違和感のない人物描写や物語展開のことを指していると考えられる。これはホワイトが問題にし、歴史学の世界では問題にされて来なかった、客観的な歴史表象にも実際には作者のモラルが反映しているという、表象そのものの客観性に疑義を抱く考え方と同じである。ハッチオンのポストモダニズムの表象観は、ホワイトが歴史記述に対して抱いている疑問や Oates が事実の表象に対して抱いている不信感を的確に表現していると考えられる。ホワイトの歴史記述に関する考え方や Oates の事実の表象に対する考え方は、その表象の本質や方法に問題を見出しているという点でポストモダンのものである。つまり、ポストモダニズムとは、我々が歴史や事実と信じているものが実はその作者によって構築されているフィクションなのであるということをはっきりと認識し、そのことを問題にする考え方なのである。

ハッチオンは、ポストモダン・フィクションが「終結(閉鎖)、全体化、普遍性といった概念を利用すると同時にそれらに疑問を投げかける」(110)ことや「時間的關係を非=自然化(異質化)する」(112)ことや「じっさいの歴史的記録や記録方法を一貫して利用・乱用する」(138)ことによって、そのような歴史記述や事実の表象の本質や方法を問題化していると論じているが、*Bellefleur* はこのようなポストモダニズムの手法のいくつかを使って事実の表象を問題化していると考えられる。

ここでは *Bellefleur* を、リアリズム的な、透明で常識的自然性を備え、物語化された歴史表象の人工性や虚構性に対する批判の書と捉えて論を展開していく。具体的に三冊の歴史書 John W. Caughey と Ernest R. May の *A*

*History of the United States* (1964)、John A. Garraty の *The American Nation: A History of the United States* (1971)、Hugh Brogan の *The Penguin History of the United States of America* (1985) を物語化された一般的なアメリカの歴史表象の代表例とする。これらの書物と *Bellefleur* を比較しながら *Bellefleur* がポストモダニズムの手法——物語の断片化と実在の人物の挿入——を用いて一般的歴史書の人工性や虚構性をどのように明らかにしているか分析する。

## II

*Bellefleur* は、78 個のエピソードが5つの編で区切られている *Bellefleur* 家七代の年代記であるが、年代順に物語が構成されている一般的な年代記や歴史書とは異なっている。この小説は、*Bellefleur* 家の約 200 年間の出来事が次々と断片的に現れ、その断片を一つの物語にまとめあげる一貫した視点がない。45 人以上という登場人物の多さとその物語配列の一貫性のなさがこの小説を複雑なものにしていると言える。78 個のエピソードはそれぞれ独立した話だが、それぞれのエピソードがまったく関係していないのかというと、そういうわけではなく、第 1 編のあるエピソードの続きと思われるエピソードがその後の編に断片的に現れたりもする。エピソード間に連続性が見出せないのと同じように、それぞれの編の間にも連続性や関連性は見出せない。第 1 編 MAHALALEEL には 12 のエピソードが収められている。Mahalaleel とは第六世代 Gideon とその妻 Leah の時代、つまり現代の *Bellefleur* 屋敷に迷い込んできた野良猫の名前である。第 1 編には、現代の話、1800 年代初期の話、*Bellefleur* 家全ての世代を通してあるトピックについて語られている話などが含まれているが、一つ一つのエピソードの中にも第 1 編全体から見ても、始まり、中、終りという一般的な物語に備わっている明確な筋を見出すことができない。更に第 1 編の表題の MAHALALEEL は、この編の内容を象徴、総括している言葉とは考えられず、表題と内容にちぐはぐさが感じられる。これは第 1 編に限った事ではなく

て、すべての編がこの調子で物語の順序の一貫性と筋の終結性がないだけでなく、表題と内容の一致が見られない。Sarah E. Lauzen は小説中の事件が多すぎるとその小説の全体像がつかみにくくなると述べている。

Overabundance of incident often turns into a reduction of real plot, blocking the reader's detection of the figure in the carpet. We have the wandering narrative thwarting unity, the difficulty of connecting things up . . . (99)

*Bellefleur* は小説全体の時間軸が常に混乱していることと、登場人物が多いことに伴っていくつもの物語が存在することにより、一貫した話の筋を把握することが困難になっている。

このような *Bellefleur* の何ら基準のない章立てと物語の順序の一貫性のなさは、年代順に記述され、それがトピックごとに何章かに分けられている一般的な歴史書の構成方法の人工性を明らかにしていると考えられる。*A History of the United States* は 37 章、*The American Nation: A History of the United States* は 30 章、*The Penguin History of the United States of America* は 5 つの編の中に 26 章が存在し、章ごとにタイトルがつけられている。年代順に章立てされ、その章ごとにタイトルがつけられているということは、何らかの基準でその作者によってアメリカの歴史の時代が区切られ、いくつもの小さな物語化が行なわれているということである。ヘイドン・ホワイトはそのような歴史書の構成方法の人工性を指摘している。

. . . it is a fiction of the historian that the various states of affairs that he constitutes as the beginning, the middle, and the end of a course of development are all “actual” or “real” and that he is merely recording “what happened” in transition from the inaugural to the terminal phase. But both beginning state of affairs and the ending one are inevitably poetic constructions, and as such are dependent upon the modality of the figurative language used to give them the appearance of coherence. This im-

plies that all narrative is not simply a recording of “what happened” in transition from one state of affairs to another, but is a progressive re-description of sets of events in such a way as to dismantle a structure encoded in one verbal mode in the beginning so as to justify a recording of it in another mode at the end. (Canary and Kozicki 60)

ホワイトが述べているように、ある出来事の結末は始まりを正当化するために、つまり、様々なつじつまを合わせるために作者の見解や社会的道徳が文章に反映している可能性がある。

上記の歴史書の章立てを見ても、同じ出来事が章の始まりとして位置づけられていたり、結末になっていたりする。例えば、リンカーンの暗殺という歴史的な大事件は、*A History of the United States* では、第13章 “Civil War” (241–60) の結末に記されている。これはリンカーンの暗殺を南北戦争の終結の象徴と捉えていることを意味している。一方、*The American Nation* では、第16章 “Reconstruction and the South” (505–28)、*The Penguin History of the United States of America* では第16章 “Reconstruction 1865–77” (356–84) の冒頭にリンカーンの暗殺が記されている。この二冊はリンカーンの暗殺を再建期の始まりの象徴であると見なしていることができる。ホワイトが述べているように、この三冊を比べてみると、同じ出来事なのに、記述者によって、歴史上のリンカーンの暗殺の位置づけが違うのである。*Bellefleur* の秩序のない物語配列は、歴史という事実を扱う歴史書ですら恣意的な歴史区分を行なっていることを明らかにし、客観的で一貫した歴史記述の虚構性を強調するものとなっている。

バリー・ルイスは「ポストモダニズム・フィクションは、ただ過去を混乱させるだけでなく、現在をも変革する。それは重大な時を表すカイロス (kairos) の意味や、通常の時を表すクロノス (chronos) の単調な流れを歪めることで、直線的な語りの一貫性を無秩序にする」(211) と述べている。これまで述べてきたように、*Bellefleur* 内の物語の無秩序な順序は、ただ過去の出来事をでたらめな順番で描いて過去そのものを混乱させるというも

のではなくて、我々が現在から過去を認識するその認識の仕方、つまり過去の出来事は一貫した物語として順序だてて語ることができるという思い込み、を変革するものでもある。ハッチオンも歴史が結局は歴史家の目を通して構築されたフィクションであるということを以下のように述べている。「今日われわれはどのようにして過去を知るのか。過去についての言説、そのテキストを通してである。つまり、その歴史的出来事の痕跡——古文書資料、記録文書、目撃者の語るナラティヴ…そして歴史家——を通してである」(55)。*Bellefleur* の物語配列のでたらめさは、一般的な歴史書の自然さに慣れている我々読者に違和感を与え、我々が何の疑問も抱かずに歴史であると信じていることが、実は歴史家の目を通して順序だてて構築され、うまくまとめられた一つの痕跡に過ぎないということを認識させる効果をもつ。一般的な歴史書は、客観性を装いながら年代順という順序を崩すことなく小さな始まり、中、終りの構造をいくつも組み合わせで一貫した物語を構築している。*Bellefleur* は時代区分、表題、物語の配列といった歴史書の常識をすべて破壊することにより、そのような歴史書の人工性を浮き上がらせていると考えられるのである。

### III

*Bellefleur* では歴史上の実在人物である Abraham Lincoln や John Brown が *Bellefleur* 家の人々と関わりがあったという設定になっている。ここでは、リンカーンの例を取り上げて実在の人物をフィクションに挿入するというポストモダニズムの手法によって、*Bellefleur* が問題にしていることが何なのかを考える。

リンカーンは 1865 年 4 月 14 日、観劇中に役者の一人にピストルで打たれて翌朝死亡した。この暗殺事件はどの歴史書でも取り上げられている。*A History of the United States* では、以下のように記されている。

That night [April 14] . . . he was assassinated. John Wilkes Booth burst

into his box at Ford's Theatre and shot at point-blank range. Lincoln died early the next morning without ever regaining consciousness. His loss was demoralizing to the North and a disaster to the South; only he could have thwarted the hotheads in Congress intent on punishing the rebels. That martyrdom was thrust upon him was altogether senseless, yet by its very drama it intensified his appeal to the hearts of men then and ever since. (259)

一見するとこの記述は、リンカーンの暗殺を客観的に捉えているように思われる。しかし、後半の“*That martyrdom . . . ever since.*”の部分は、単なる出来事の表象ではない。この部分は、リンカーンの死に作者が意味を与えていると言える。ホワイトは「現実の出来事が語る、自ら語るなどということは起きえよう筈がないのである。現実の出来事は、黙って存在さえしていればそれで足りるのだ . . . 物語の語り手を気どるなどとはあってはならないことだ」(20)と述べている。リンカーンの暗殺は、単に起こった出来事であって、それが愚かなものだったとか、人々の心に訴えかけたなどという記述は、作者のこの事件に対する見解に他ならないのである。

*The American Nation*でのリンカーン暗殺は以下のように記述されている。

Then, on April 14, he held a Cabinet meeting at which postwar readjustment was considered at length. That evening, however, while he was watching a performance of the play *Our American cousin* at Ford's Theater, a half-mad actor, John Wilkes Booth, slipped into his box and shot him in the back of the head with a small pistol. Early the next morning, without ever having regained consciousness, Lincoln died.

The murder was part of a complicated and senseless plot organized by die-hard pro-southerners. Seldom have fanatics displayed so little understanding of their own interests, for with Lincoln perished the South's best hope for a mild peace. After his body had been taken home to Illinois for burial, the national mood hardened. It was not a question of avenging the beloved Emancipator; rather a feeling took possession of the public mind that the years of pain and suffering were not yet over,

that the awesome drama was still unfolding, that retribution and a final humbling of the South were inevitable. (505)

この記述からは、リンカーン暗殺後のアメリカの重苦しい雰囲気伝わってくる。しかし、*The American Nation* の記述と同じように、この記述にもリンカーンの暗殺という一出来事を、国民の心理と結びつけて語った作者の創作的意図が見え隠れしている。

*The Penguin History of the United States of America* でも、暗殺の描写は上の二つの歴史書とほぼ同じ内容だが、リンカーンが死んだ時間や犯人が暗殺の際に口走った言葉などが記されていて、他の歴史書よりも詳細に記述されている。ここで注目すべきなのは、このような出来事の詳細ではなく、以下のような作者の主観が違和感なく溶け込んだ記述である。

There was an explosion of grief and rage in the North. Lincoln was given the greatest funeral in the history of the United States. . . . Nothing could repair the loss. It was not just that Lincoln was a good and great man. His talents had seldom been needed more. The problem of peace would have perplexed even him; his successor was to make them much worse. With Lincoln died the remote chance of good peace. Booth condemned the South to generations of squalid backwardness and the races in America to a long, unhappy struggle which is not over yet. Some such outcome might well have occurred even if Lincoln had lived; he never pretended to be a miracle-worker; but his prestige, his wisdom, his political guile, would surely have shortened America's racial agony or mitigated its intensity. (357)

この記述を読んでも、やはり読者は違和感を感じないだろう。上の二つの歴史書では遠まわしにほめかされているだけだったが、この本には「もしリンカーンが暗殺されなかったら、アメリカの人種問題は変わっていたに違いない」という現代の多くの人々が感じていると思われる事柄が直接記述されている。よって、仮定法が使われている。このような記述が、い

くら現代の読者に受け入れられようとも、これは単なる憶測であり、リンカーンを必要以上に持ち上げる考え方であると言える。つまり、事実の記述というよりは、リンカーンの価値を高める物語化が行なわれているといえることができるのである。

以上のように、三冊の歴史書の論調は、リンカーンが暗殺されていなかったら、アメリカの人種問題は今とは違っていただかもしれないという憶測を含み、リンカーンの価値を高めるような物語化を伴ったものである。ホワイトは歴史上の出来事の物語化の一般的な原則を「出来事は、もともとの起きた順という時間的な枠組に従って記録されるばかりでなく、同様に物語られもしなければならない。つまり単に連続して起きた事件としては持ちえない構造を備え、意味的秩序をも備えていなくてはならないのである」(21-2)と述べている。リンカーンの死とそれ以降の人種問題を関連づけて歴史的な意味を与えているのは、その歴史を表象する歴史家であり、その歴史書を読む読者である。このように、客観的とされる歴史書においても、読者によって共有されている歴史上の出来事についての通説に沿った物語化が、ハッチオンの言う「常識的自然性」を伴って行なわれていると言える。出来事を表象する記述の中に、作者や社会の通説が事実として違和感なく溶け込んでいるということである。

*Bellefleur* の中でリンカーンについての話が登場するのは第2編 *The Walled Garden* 中の“The Vital of Poison”と第5編 *REVENGE* 中の“The Skin-Drum”というエピソードである。“The Vital of Poison”は第五世代のNoelの物語であるが、ここで *Bellefleur* 家に伝わる第三世代のRaphaelの友人だったLincolnの秘密が語られる。

Strangest of all was the contrived death, the “assassination” of President Lincoln, an intimate friend of grandfather Raphael’s — or so family legend would have it, and Noel, being skeptical, *did* have his doubts. But it was generally believed in the family that Lincoln had arranged for his own “assassination,” so that he could retire from the world of politics

and strife and domestic pain, and live out the remainder of his days as a special guest as Bellefleur Manor. The poor man had come to abhor his life with its public and private burdens, and its very real crimes (so many thousands of men killed in the war, which no notion of political justice could ever absolve, and hundreds of civilians imprisoned in Indiana and elsewhere, without due process of law — simply at *his* imperial command) . Lincoln had, it was said, so despaired of life that he wanted only to tear a hole in the earth's side and plunge through and lose himself forever. . . . And so, by means of a plot Noel had never quite understood, which was completely financed by Raphael Bellefleur and perhaps even imagined by him, the public Lincoln had been “assassinated” so that the private Lincoln might live. . . . (111–2)

また、“The Skin-Drum”はBellefleur家に代々伝わる、第三世代のRaphaelの皮膚で作られたドラムの話である。時代は1800年代後半から1900年代の始め頃と考えられる。しかし“The Skin-Drum”の前後のエピソードは、現代の話になっており、やはり、話の流れは年代順には語られておらず、前後関係に一貫性がない。Bellefleur屋敷はRaphaelが建造したのであるが、この屋敷に来訪したことがある有力者の中にリンカーンが含まれているのである。それは以下のように記述されている。“... of course there was the mysterious ‘Abraham Lincoln’ who had sought refuge at Bellefleur, where he was to spend the rest of his days.” (477) これらの引用からもわかるように、この小説の中では、実は暗殺されずに生き残っていたリンカーンらしき人物が、余生をBellefleur家で送ったというのである。このような話は、リンカーン暗殺の歴史を知っている現代の読者から見れば、まったくのフィクションであることは明らかである。しかし、Abraham Lincolnやassassinationという単語に引用符が、Lincolnにmysteriousという形容詞が付けられ、強調されていることによって、「リンカーンは暗殺された」という読者の歴史認識を一瞬、揺るがし、リンカーンは生きていたかもしれないという想像を呼び起こすかもしれない。

“The Skin-Drum”の中のリンカーンについての話は、Raphaelの主治医Dr.Sheelerが、Bellefleur家で目撃したリンカーンらしき人物の描写とRaphaelがDr.Sheelerに語ったリンカーンの暗殺事件についての秘密から成り立っている。

... it was true that the aged man resembled the late President. Gaunt, hollow-cheeked, with a melancholy visage, and an obviously intelligent face, and a beard no unlike Lincoln's: but he was much shorter than Lincoln had been, probably not more than five feet six, and so of course he wasn't Lincoln; could not possibly have been Lincoln. . . . (477)

Dr. Sheelerの視点から語られているこの記述の最後の“... of course he wasn't Lincoln; could not possibly have been Lincoln. . . .”という部分は、この小説の中でもリンカーンの暗殺が周知の事実であることを暗示している。しかし、その事実を覆すような話が、Raphaelから語られる。

... iwhile President of the United States Lincoln had been near to collapse, near, even, to suicide, overcome with attacks of panic and guilt and horror arising from the thousands upon thousands of deaths the Union had suffered, and he had been quite sickened by the behavior and arrogance of Secretary of War Cameron, and of course by the meanness of Congress, and the turbulence of the country at large, even in those areas in which there was no active fighting, and (though he admitted it to no one at the time) he knew he had done wrong by imprisoning so many civilians in Indiana and elsewhere, simply because they had been suspected of proslavery sentiment, he *knew* he had behaved wickedly, and must be punished. So, aided by Raphael Bellefleur, whom he had recognized as a soulmate, the aggrieved man devised a scheme whereby an actor would be hired to “kill” him in a public place, and after his “death” an expertly constructed wax corpse would lie in state for thousands of mourners to view, and Lincoln himself, freed of his morality, would retire to the paradise of the Chautauquas, as Raphael's permanent guest.

All this came about flawlessly, Raphael insisted, and Lincoln spent his final years in near-seclusion on the estate, wandering in the woods, contemplating the lake and mountains, reading Plato, Plutarch, Gibbon, Shakespeare, Fielding, and Sterne, and playing, on long ice-locked winter evening, chess and backgammon with his host, who was himself becoming a recluse. (477-8)

*Bellefleur* というフィクションの中で語られるこのような突拍子もない事実は、現実の世界では単なるフィクションとして一蹴されるものである。しかし、*Bellefleur* 中の世界においては、この事実は Raphael が捏造した単なるフィクションなのか、新事実なのか断定はできないのである。歴史書が暗殺されたリンカーンの価値を高めていたのに対して、*Bellefleur* 中のリンカーンは、一人の人間として非常に生々しく、歴史書の高尚なリンカーン像を覆すものとなっている。ここで描かれているたくさんの奴隷制賛成論者を投獄していたことに自責の念を感じていたというリンカーン像は Oates が創造したフィクションであるが、読者にしてみれば、ありえなくもないと思えるものである。よって、自分の酷い行為に自責の念を抱いていたリンカーン像が仮に上記の三冊の歴史書に記述されていたとしても、それなりに説得力のある記述であれば、事実として歴史の自然な流れの中に溶け込む可能性がある。つまり、歴史書がリンカーンの死を人種問題の後退と解釈することに違和感を覚えないのと同様に、*Bellefleur* で構築されているリンカーンの苦悩にもそれほど違和感を覚えないのである。このように *Bellefleur* は、リンカーンが生きていたという歴史上の事実の明らかな歪曲を行ないながら、信じられなくもない話を構築することによって、歴史書そのものの正確性に疑問を投げかけている。そして歴史書が違和感なく自然に行なっている作者の主観や社会の道德などを含んだ物語化の人工性や虚構性を明らかにしているのである。

## IV

これまで見てきたように、*Bellefleur* はポストモダニズムの手法を用いて歴史表象の人工性や虚構性を明らかにしている。*Bellefleur* のこのような物語構造は、フレデリック・ジェイムソンが述べている歴史観を体現するものでもある。

History . . . is *not* a text, for it is fundamentally non-narrative and non-representational; what can be added, however, is the proviso that history is inaccessible to us except in textual form, or in other words, that it can be appropriated by way of prior (re)textualisation. (82)

*Bellefleur* は、ポストモダニズムの手法によって、歴史の中の出来事が歴史家によってテキスト化されるということを強調しながら、我々が歴史を知るためにはテキスト化を経たフィクションを経由するしかないということをお我々に再認識させる。つまり *Bellefleur* は、我々が事実と思い込んでいる歴史書の中の事実の表象が、実は作者が独自に色付けしたフィクションであるということを示しているのである。さらに言えば、それは、客観的に言葉で事実を描くことが不可能であるということを示唆しているのである。

## 引用文献

- Brogan, Hugh. *The Penguin History of the United States of America*. London and New York: Penguin, 1985.
- Caughey, John W. and Ernest R. May. *A History of the United States*. Chicago: Rand McNally & Company, 1964.
- Foley, Barbara. *Telling the Truth: The Theory and Practice of Documentary Fiction*. Ithaca: Cornell U. P., 1986.
- Garraty, John A. *The American Nation: A History of the United States*. 2nd ed. New York: Harper & Row, 1971.
- Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as Socially Symbolic Act*. Ithaca and New York: Cornell UP, 1981.
- Lauzen, Sarah E. "Notes on Metafiction: Every Essay Has a Title." *Postmodern Fiction: A Bio-Bibliographical Guide*. Ed. Larry McCaffery. New York: Greenwood Press, 1986. 93–116.

Oates, Joyce Carol. *Bellefleur*. 1980. New York: Plume, 1991.

—. *Where I've Been, and Where I'm Going: Essays, Reviews, and Prose*. New York: Plum, 1999.

White, Hayden. "The Historical Text as Literary Artifact." *The Writing of History: Literary Form and Historical Understanding*. Eds. Robert H. Canary and Henry Kozicki. Wisconsin: The University of Wisconsin Press. 41–62.

ハッチオン、リンダ『ポストモダニズムの政治学』川口喬一訳、法政大学出版局、1991。

ホワイト、ヘイドン「歴史における物語性の価値」W. J. T. ミッチェル編『物語について』海老根宏他訳、1987、15–49。

ルイス、バリー「文学とポストモダニズム」スチュアート・シム編『ポストモダニズムとは何か』杉野健太郎他訳、松柏社、2002、205–230。